

序

高木和子先生は、1964年に東京教育大学教育学部心理学科を卒業され、財団法人野間教育研究所助手に就任。ほどなくして母校に戻り、大学院博士課程を74年におえられました。その後、東京成徳短期大学常勤講師や山形大学教育学部助教授を歴任され、90年に立命館大学文学部教授として着任されました。この間、日本読書学会の「読書科学研究奨励賞」を受賞され、また、「幼児の物語理解における継時的情報能力の役割」という論文名による学位（博士・教育学）を筑波大学から授与されています。

先生の研究における専門領域は、発達心理学ですが、特に、幼児の物語理解や文字・文化習得の過程に関する事を中心にされています。すなわち、就学前から小学校低学年までの幼児や児童を対象として、絵本や物語理解を通しての発達の様子、また、言葉や文字・漢字をどのように学び、身につけていくのかといったテーマを、臨床的、実証的データによって探られています。一言でいえば、「幼児期の認知発達および言語経験に関わる調査と研究」とまとめることができるでしょう。近年は、研究対象をさらに広げられ、生涯学習の問題も取りあげておられます。先生は、文部科学省の科学研究補助費を幾度も受けられ、精力的に調査結果を論文として世に問われ、かつ、学部生・院生の指導に全力をあげてとり組んでこられました。先生の学生指導の熱心さは、学部内でもよく知られています。多くの優秀な学生が高木ゼミから巣立ち、また大学院を経て研究者として活躍しています。

先生は、教育・研究以外の文学部や全学の役職も積極的に務められました。二部の文学部主事、続いて教育科学研究所長に二年間就かれ、間をおかずに衣笠研究機構長を三年間といったご多忙ぶりでした。ある年は、この重い役職が重なっていたこともあります。

快活でまっすぐなご気性の高木先生は、会議などにおいて、はっきりと物事の是非を説かれ、ご自分の見解を述べられます。さっぱりとしたお人柄なので、反対の意見を言って、先生から厳しく問いただされた人も、厭な気分になったりはしません。そうした人徳をお持ちなのです。

私的な事柄を記すことをお許しいただきますが、高木先生と私とは同じく90年に立命館大学に赴任いたしました。他の同年着任の方もまじえて同期会と称する懇親会を、一年に一、二度開いておりますが、その中心になられているのが高木先生なのです。

また、先生は前任校である山形大学時代に熱中されたというテニスの腕前もなかなかのものです。立命大では、時間的な余裕があまりなく、テニスを楽しむことも少なくなられたようですが、赴任当初の数年間は、いまの敬学館となった西コートにおいて先生の勇姿(?)を時に拝見いたしましたし、私もその相手をさせていただきました。テニスの時に限らず、先生から山形名産の“さくらんぼ”をふるまわれたりした経験のある人も多いことでしょう。

おそらく、先生と親しく交わったこうした思い出は、多くの教職員がお持ちでしょう。一昨年、先生がご病気され、入院された折、心配した学生や教職員が大挙して病院にお見舞いにかけてきました。かえって、先生にご迷惑をおかけすることになったかも知れません。私たち執行部のメンバーがお伺いした時は、入院されている七、八名の患者さんたちの前に立って、号令をかけ、リハビリの体操の真っ最中でしたので驚いてしまいました。ここでも先生はリーダー・シップを発揮しておられると感じ入ってしまいました。先生は、「順番にしていって、たまたま今日が私だったのですよ」と言われま

した。真偽のほどはわかりませんが……。ご病気もほどなく回復され、現在、先生は、またもとのお元気なお姿で変わりなくご活躍されていて、私たちは安堵の思いであります。

こうした高木先生がご定年を迎えられることは、私たちにとりまして大変に残念でなりません。が、先生のご健康とこれまでと同様、さらに多くの人たちの導き手となられる先生の今後の愈々のご活躍をお祈りするばかりです。

高木和子先生に対し、学校法人立命館は名誉教授の称号をお贈りし、その長年のご貢献を讃えます。本会は、ここに、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、このご定年記念の論集を編んで先生に献呈いたします。ありがとうございました。

2007年1月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木 村 一 信